



萬鉄五郎《もたれて立つ人》1917年 東京国立近代美術館所蔵

企画展 平成28年10月1日(土)～11月13日(日)

2 日本におけるキュビズム—ピカソ・インパクト

企画展 平成28年10月15日(土)～11月6日(日)

3 大◎荒神展

企画展 平成29年2月25日(土)～3月20日(月・祝)

4 ミュージアムとの創造的対話 vol.1 MONUMENT/DOCUMENT(仮)

4 シリーズ「学校と博物館をつなぐ」⑦ 学校の先生も博物館で学んでいます～教員のための博物館の日 in 鳥取県立博物館～

5 [自然] コラム 鳥取県多里地域の「クロム鉄鉱」—我が国最古のクロム鉱山—

6 [人文] 資料紹介 世界史とつながる 亀井茲矩の朱印船貿易

コラム 古文書を守り伝える

7 [美術] 新収蔵品紹介 辻 晋堂《木樵と熊》

コラム 美術館フォーラムと美術館キャラバン

8 イベント案内:後期(10～3月)

日本におけるキュビズムーピカソ・インパクト

20世紀初頭、フランスを中心にヨーロッパ各地で様々な革新的な美術運動が登場しました。その多くは19世紀後半に台頭した印象主義への反発から生まれています。なかでも1907年頃にパリに発生し、パブロ・ピカソ（1881－1973）とジョルジュ・ブラック（1886－1968）によって主導されたキュビズムは、美術史に大きな変革をもたらしました。その手法が、ルネサンス以来脈々と続いてきた遠近法による従来の絵画観を一新する可能性を秘めていたからです。

キュビズムの手法には、三次元の空間にある対象を面によって解体し、基本的な線と濃淡により二次元に再現する手法（分析的キュビズム）、新聞の切れ端を貼り込むといった現実のオブジェを利用したパピエ・コレ（貼り紙）やコラージュの手法、また分析的キュビズムで個別に追及された空間、



パブロ・ピカソ《茄子》1946年 プリダストン美術館蔵 ©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)



東郷青児《コントラバスを弾く》1915年 東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館蔵



仲田定之助《首》1924年 東京国立近代美術館

形態、色彩を再統合させた総合的キュビズムなどがあります。これら一連の活動は、日本の画家たちにも大きな影響を与えました。

キュビズムが日本へ伝えられたのは1910年代から20年代にかけてでした。当初は、機械の美しさやスピードを美術に取り入れた未来派と様式上の明確な区別もないまま、非自然主義的な傾向の絵画表現として紹介されていました。キュビズムを取り入れた代表的な画家には、東郷青児（1897－1978）や黒田重太郎（1887－1970）、日本におけるキュビズムの記念的な作品《もたれて立つ人》を描いた萬鉄五郎（1885－1927）、独自にキュビズムを消化した坂田一男（1889－1956）らがいます。また、通常キュビズムとは結びつけられない前田寛治（1896－1930）や古賀春江（1895－1933）の類似した作品は、この運動の広がりを暗示しています。

しかしフォーヴィスムやシュルレアリスムといった同じ時代の他の動向と比べた時、その影響は限定的でした。多くの画家はつかのまキュビズムの実験に手を染めた後、そこから足早に立ち去って行ったのです。少しの例外を除いて、キュビズムは日本の画家によって深められることはありませんでした。

ひとたび姿を消したキュビズムの影響は意外な場所で復活します。契機となったのは1951年に東京と大阪で開か



堂本尚郎《魚の店》1954年 京都国立近代美術館蔵

れたピカソの展覧会でした。ピカソの油彩画が多数紹介されるとあって多くの美術雑誌で特集が組まれ、ピカソについての書籍も数多く出版されました。1950年代前半、日本の美術界にピカソは大きな衝撃を与え、その影響は洋画のみならず、日本画から彫刻、工芸といった広いジャンルにまで及びました。多くの作家がキュビズムの手法を取り入れながら、様々な主題の作品を制作しました。そうしたなか1956年のミシェル・タピエの来日を契機に、洋画界を中心にアンフォルメル旋風が起り、狂乱的なピカソブームは1950年代後半に下火になりました。

この展覧会では、キュビズムが二度にわたって別々の文脈で日本の作家たちに受容された点に注目し、ピカソとブラックの作品、そしてそれらに触発された日本の作家たちの作品、約150点によって日本におけるキュビズムの展開を検証します。

（美術振興課 林野 雅人）



吉仲太造《生きものH》1955年 板橋区立美術館蔵



赤松の荒神祭（昭和50年ごろ）

企画展

平成28年10月15日(土)～11月6日(日)

開館時間：午前9時30分～午後3時30分

会場：大山寺圓流院

だい こうしん てん
大◎荒神展

鳥取県には、東部に麒麟獅子舞、西部に荒神祭という重要な民俗文化財があり、いずれも国の「記録作成等の措

置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されています。

当館では先に麒麟獅子舞の伝播と分布に関する展覧会を開催しましたが、この度は県西部の重要な民俗文化財である「荒神祭」の調査成果を展示紹介します。その会場は、久松山下を飛び出し、やがて開山1,300年を迎える大山寺境内で関連行事とともに催します。

そもそも荒神とは、一般的に「三宝荒神」の略で竈の神といわれていますが、西日本では屋敷神で、同族で祀られることが多い神様です。

出雲（島根県東部）から伯耆（鳥取県中西部）にかけて、荒神にその年の収穫を感謝する「申し上げ」、「荒神講」と呼ばれる行事が濃密に分布し、毎年収穫後の11月から12月を中心とする時期に行われています。巨大な藁蛇と大量の幣束を製作し、荒神を祀った樹木や石などに供えることを基調に多様な形態をもって伝承されています。

この展覧会では、これら各地の荒神祭りを紹介するとともに、荒神に奉納される民俗芸能である「荒神神楽」の衣装等も展示し、荒神様に対する人々

の想いを今に伝えます。紅葉に彩られた大山寺で荒神信仰の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

（学芸課 福代 宏）

■会場：大山寺 圓流院

〒689-3318 西伯郡大山町大山 58

TEL090-3178-6774

<http://www.enryuin.jp/>

観覧料：圓流院参拝志納金が必要。ただし、学校活動で来館する小・中・高校生及びそれらの引率者、並びに障がいのある方、介護の必要な方等及びそれらの介護者は無料。

■会場アクセス（JR 米子駅～大山寺）

(1) マイカー

・山陰道米子東IC。下車、県道 24 号線を大山方面へ約 12km（約 30 分）。駐車場あり。

(2) 公共交通機関

・路線バス【日本交通バス 大山方面行き】で約 50 分

・大山一歩バス【右回りコース（赤バス）】で約 30 分

・【左回りコース（青バス）】で約 50 分



三宝荒神像（個人蔵）



ミュージアムとの創造的対話 vol.1 MONUMENT/DOCUMENT(仮)

当館は昭和47年の開館以来、「博物館はみんなの広場」というミッションのもと、様々なプログラムを通じて、文化芸術を保存し、次世代へ継承していくための活動を行ってきました。

「ミュージアムとの創造的対話」は、本館のこれまでの活動の蓄積と成果に新たな光を当て、展覧会を通じてこれからの美術館／博物館のあり方を考えるためのシリーズ展です。本展では、博物館内外を会場に、国内外の優れたアーティストによる多様な表現を紹介することで、本来的に博物館／美術館を構成している「コレクション」や「建築空間」、「アーカイヴ」といった要素を改めて検証し、美術館／博物館の現代的な意味を問い直すことを試みたいと思います。

第一回目の今回は、「モニュメント」と「ドキュメント」をテーマに、彫刻作品を巡る諸問題を提起する現代美術作家による展示を行います。記念碑・記念物を指す「モニュメント」とは、ある時代の人々の記憶を留めるというその目的から、永遠性や不変性といった性質を持つと同時に、公共や歴史化というある種政治的な諸問題を孕みつつ存在しているものです。一方、記録とその伝達にまつわる「ドキュメント」とは、出来事を記述し、証明することにその本質を持つことから、事実性や一時性に近い言葉です。この二つの特質は、ミュージアムというモニュメンタルな場所で行われる仮設としての展覧会を考える際のキータームであると同時に、西洋に端を発する美術の歴史に現

代の作品がいかにアプローチしているかを検討する上で有効であるように思われます。

現在、出品作家とともに県内各地をリサーチしながら、館外での展示場所を検討中です。また、会期中には作家と来場者、学芸員が対話する場を設けたいと思っています。この新たな試みにご期待いただければ幸いです。

(美術振興課 赤井 あずみ)



白川昌生個展
「消された記憶」会場風景より
《長崎原爆投下記念碑》
《強制連行犠牲者追悼碑》
2015
©木暮伸也

シリーズ「学校と博物館をつなぐ」⑦

学校の先生も博物館で学んでいます～教員のための博物館の日 in 鳥取県立博物館～

「教員のための博物館の日」というイベントをご存じでしょうか。その名のとおり、学校の先生を対象にしたイベントです。鳥取県立博物館では今年で3回目になりますが、この取組みは全国各地の博物館で展開されていて、今年度は北は北海道帯広から南は九州宮崎まで26の地域で、それぞれ特色のある内容で開催されます。

当館の場合はというと、まずは博物館に来て展示を見ってもらうことと、学芸員と知り合いになってもらうことを目的として実施しています。以前は、授業に役立つワークショップを実施していた時期もありますが、最近では、遠足や校外学習で



2016年度講演会「学校と博物館をつなぐ」

来館された場合の下見も兼ねて、博物館の展示資料を活用した授業展開の参考となるよう、自然・人文・美術の常設展示室

で展示解説を行っています。また、学校が博物館を利用した実例を紹介する講演会や、授業で役立つ資料の展示。さらに、学校と博物館との連携



2016年度チラシ

を具体的に学芸員と相談できる「個別相談会」など、先生方が博物館を楽しみながら授業のネタ探しのできる1日を提供しています。「教員のための博物館の日」は、今後も夏休み中の研修として開催しますので、興味のある先生はぜひご参加ください。カリキュラムの変更に伴い、授業時数が増えるなど、校外での学びが少なくなってきた昨今ですが、学芸員が学校にお伺いすることも可能です。是非、授業での博物館の活用をご検討ください。

(学芸課 田中 博昭)

鳥取県立博物館 学校連携担当：0857(26)8044

鳥取県多里地域の「クロム鉄鉱」—我が国最古のクロム鉱山—



写真1. クロム鉄鉱 (TRPM-82005-006)

“クロム”は、銅やアルミニウムなどと同じ金属元素の一つです。クロムと鉄とニッケルの合金がステンレスで、流し台などに使われています。このようにクロムは、身近で広く利用されています。

それでは、このクロムは自然界ではどのように存在しているのでしょうか。天然に生成される結晶質の物質のことを「鉱物」といいますが、クロムはクロムスピネルという鉱物に含まれています。そして、このクロムスピネルを主要鉱物とする「岩石」が『クロム鉄鉱(クロミタイト)』(写真1)です。クロム鉄鉱山で採掘されるのは主にこの岩石です。

国内のクロム鉄鉱の採掘は、明治30年頃(1897年頃)に鳥取県日野郡日南町多里地域で始まりました。当該地域にはマンツルの構成物質であるかんらん岩が分布しており、ここにクロムを多く含むクロム鉄鉱が集まっている場所(クロム鉄床)が発見されたからです。中でも、若松鉄鉱山(写真2)は国内最大規模で、日本一の生産量を誇っていました。多くの鉄鉱山が昭和の時代に閉山や休山になる中で、若松鉄鉱山は平成8年(1996年)の休山まで採掘が行われており、国内の産業を支えた重要な鉄鉱山でした。この実績から、多里地域のクロム鉄鉱山は「近代化産業遺産群(経済

産業省2008年)に認定されています。

多里地域のクロム鉄床の形成については諸説ありますが、近年の研究では、かんらん岩とマグマの化学反応の結果であることが示唆されています

のです。このようなクロム鉄床の成因論については、多里地域を中心に活発な研究が行われており、当該地域は学術的にも重要な地域となっています。

このように多里地域のクロム鉄鉱は鳥取県を代表する地学資料であり、今年、日本地質学会によって鳥取県の『県の石』に選定されました。当館では、多里地域で採掘されたクロム鉄鉱を自然展示室で常設展示しています。実際に触れることも可能ですので、クロム鉄鉱の“重み”を感じてみてください。その“重み”は標本の重量によるものだけではないと感じていただければ幸いです。

(学芸課 田邊 佳紀)



写真2. 若松鉄鉱山(鳥取県日野郡日南町/2016年5月撮影)

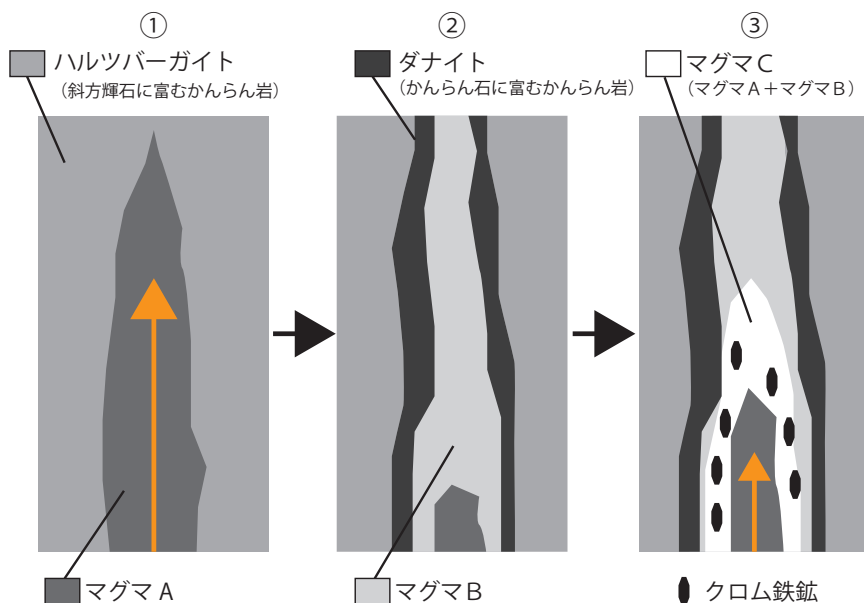


図1. クロム鉄床の成因(ポディフォーム・クロミタイトの成因モデル(Arai and Yurimoto (1994), 荒井(2009)より編図)
①ハルツバーガイトに高压のマグマAが貫入 ②ハルツバーガイトとマグマAが反応し、ダナイトとマグマBを形成 ③再度マグマAが貫入、マグマAとマグマBが混合され(マグマC)クロム鉄鉱を形成(参考:荒井, 2009)

資料紹介

世界史とつながる 亀井茲矩の朱印船貿易

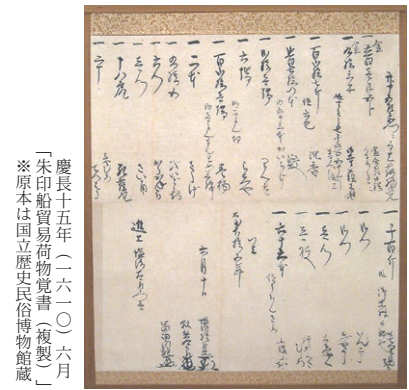
中学校の社会科や高等学校の日本史の教科書では、江戸幕府初期の外交政策を説明する中で「朱印船貿易」が紹介されます。朱印船貿易とは、鎖国体制がしかれる直前、幕府発給の海外渡航許可書（朱印状）により行われていた東アジアや東南アジア諸国との交易のことです。この朱印船貿易を地方の小大名で唯一行っていた、鹿野城主（鳥取市鹿野町）の亀井茲矩をご存じでしょうか。

亀井茲矩（1557～1612）は、慶長12～14年（1607～1609）にかけて“西洋”（現マカオ周辺もしくは東南アジア一帯）に1回、“シャム”（現タイ王国、当時はアユタヤ）に2回、計3回朱印船を派遣しています。この数は加藤清正らと並び大名としては4番目に多い数です。

朱印船は、5～10月の間に目的地に向け長崎を出港し、翌年6、7月頃の貿易風に乗って帰国しました。航海は片道20～50日程度です。交易船は中国のジャンク船をベースにした和洋中折衷の船で、茲矩はこれをシャムで購入しています。

常設展示では、慶長15年（1610）にシャムから輸入した品物の一部を書き上げた史料を展示しています。これによると、蘇芳（染料）、沈香（香料）、鯨皮、象牙、サイの角、ビードロ（ガラス製品）、織物、シャム鉄砲などを輸入していたほか、クジャクやインコ、ジャコウネコなど生きた動物も持ち帰っていたことが分かります。

逆に、輸出品としては当時世界の1／3の産出量を誇った日本の「銀」が主なものであり、茲矩は石見銀山（島



根県大田市)の銀を調達したほか、日野銀山（日南町）の経営を行っていたことが知られます。

このように17世紀初頭の因幡・伯耆は、亀井茲矩の朱印船貿易や「銀」を媒介に、アジアや世界とつながる、日本史の表舞台であったのです。

（学芸課 大嶋 陽一）

コラム

古文書を守り伝える

博物館の重要な使命として、収蔵されている資料を保存し、未来へと継承していくことがあります。しかし、博物館に収蔵されている資料は多種多様であり、適切に保存するのは簡単ではありません。特に古文書は、管理が難しい資料の一つです。古文書は丈夫な和紙に書かれているものがほとんどですが、紙である以上は虫害・汚損はもちろん、火災・水害などでもたやすく失われてしまいます。古文書が現代に残ること自体が、文書を伝えてきた人々の努力の賜物なのです。

ところで、当館に寄託されている資料に、「相見家文書」があります。相見家文書は古いもので元弘3年（1333）の文書が含まれている、米子市八幡地域の武士の文書です。特に【写真1】の後醍醐天皇の自筆繪旨（命令書、写真は複製）で広く知られている古文書です。

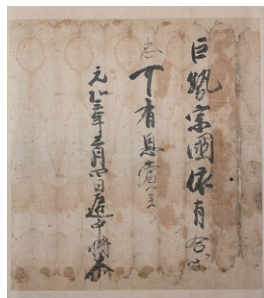
中世において文書、特に土地の権利関係に関する文書は、自らの収入源である所領に関する裁判、恩賞申請の際に不可欠な品でした。また、古文書は家系図や家譜の作成にも役立てられ、家の由緒を示す宝として扱われました。この様な背景により、相見家文書も当主以外開けることを禁じられた

【写真2】の木箱で厳重に保管され、御神体

のような扱いを受けてきました。結果として、経年劣化や災害を乗り越え、相見家文書は現代に伝わったのです。

博物館で歴史資料を見る際には、その資料を現代まで守り伝えてきた人々がいたことにも、想いを馳せてみてください。

（学芸課 山本 隆一郎）



【写真1】後醍醐天皇繪旨（複製）



【写真2】相見家文書の文書箱

新 収 蔵 品 紹 介

辻 晉 堂 《木 樵 と 熊》

土色の壁に大小様々な穴が空く、不可思議な構築物。何だか北アフリカの横穴式住居のようにも見えます。これは、彫刻家・辻晋堂（つじ・しんどう 1910年～1981年）が制作した、陶土を焼き上げた造形作品なのですが、皆さんは本作を見て何をイメージしますか？ 様々な言葉が浮かんでくることと思いますが、そんな本作に作家が付けた題名はなんと《木樵と熊》です。どこが「木樵」で、どこに「熊」がいるのか…。さらに不思議さは増していくのではないのでしょうか。

現在の鳥取県西伯郡伯耆町二部に生まれた辻は、独学で彫刻を学び、戦前は木彫で脚光を浴び、戦後は京都で教鞭をとりながら「陶彫」という造形分野を開拓し、日本の彫刻界で存在感を示

しました。辻の陶彫は最初、動物や人体を想起させる具象的なものでしたが、次第に一枚の壁のように扁平になっていきました。平面的な彫刻において、あえて逆説的に「虚空間の無限の深まりを暗示するような穴」を穿つことをテーマとしたのです。

そのシリーズの端緒に位置する本作においても、向かって右側の三分割された窓のような「穴」が端的に示しているように、虚空間への志向が明快に表現されています。そんな本作の題名について、辻は、焼き上がった本作を窯から出したところ大きな亀裂ができており、そこから、因果応報で両腕が抜ける悲劇的な報いを受けた木樵の説話が頭に浮かび、《木樵



辻 晋堂 《木樵と熊》1960年、陶彫、63.0×117.0×17.0cm

と熊」と名付けたという言葉の遺しています。造形がユニークなら、名付け方もユニークです。

辻の造形理念と作品観、題名観を印象的に示す秀作として、私たちは昨年度本作を収集しました。折を見て展示しますのでぜひご観覧ください。

(美術振興課 三浦 努)

コ ラ ム

美術館フォーラムと美術館キャラバン

現在、三部門で運営している県立博物館から美術部門を鳥取県立美術館（仮称）として独立させるとの方針については、これまでこのコラムで報告してきたとおりですが、今年度に入って、博物館としては以下のような方針で新たな美術館の姿を広く県民の皆さんに理解していただく試みを加速しています。

昨年設置された「鳥取県美術館整備基本構想検討委員会」は今年度に入っですすでに三回の委員会を開催し、とりわけ話題になっている立地の問題に関しては、この委員会とは別に、交通アクセスやまちづくり、防災面等の専門家の方を「鳥取県立美術館候補地評価等専門委員」に委嘱し、市町より推薦のあった候補地等13ヶ所について、全

員が現地を確認したうえで、四つの候補地に絞り込んでもらいました。

その一方で、美術館の姿が見えてこないという声を受けて、博物館では県内三カ所で「美術館フォーラム」を開催しました。6月18日と19日に米子と倉吉で、7月10日に鳥取で開かれたフォーラムではそれぞれ「美術館に期待するもの」「美術館と地域づくり」「美術館と人づくり」というテーマを設定し、美術館の検討状況を説明した後、美術館の専門家による基調講演と構想検討委員会の委員等によるパネルディスカッションを行いました。会場には多い所で300名以上の方々が来場され、様々な意見を積極的に発言され、関心の高さがうかがえました。

さらに新たな活動として学芸員が地



美術館フォーラムの様子（6月19日 倉吉会場）

域に出かけて、博物館の美術部門の活動や新しい美術館の構想について住民の皆さんと話し合う「美術館キャラバン」を8月以降、各地で開催しています。美術館建設に対する私たちの考えをお伝えし、なるべく多くの方に新しい美術館に関心をもっていただこうとするこれらの活動に関心を寄せていただければ幸いです。

(副館長 尾崎 信一郎)

イベント案内:後期(10~3月)

★申込み・問合せ:学芸課(0857-26-8044)・美術振興課(0857-26-8045)

自然部門 歴史・民俗部門 美術部門(毎週土曜はアートの日!)
 幼児(親子)参加OK 申込み受付

2016 10 OCT.	《ギャラリートーク》 日本におけるキュビスムーピカソ・インパクト	10月1日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料	
	《歴史講座》 原田家を訪れた人々-幕末鳥取城下の一コマ	10月8日(土)/10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との共催	
	《特別講演会 I》 日本はキュビスムに何をみたのか? -キュビスムと日本 講師:天野一夫(美術評論家)	10月8日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《野外観察会》 きのこを調べる会	10月15日(土)10:00~14:00/大山寺周辺(大山町) ■小学生~一般/30名(先着順)/無料 ●9月29日(木)~、電話のみ	
	《特別講演会 II》 ピカソのキュビスムー欧米における伝播と展開 講師:大島徹也(広島大学大学院准教授)	10月15日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《野外観察会》 秋のトンボをとろう!	10月16日(日)10:00~12:00/とっとり出会いの森(鳥取市) ■幼児~一般/30名(先着順)/無料 ●9月30日(金)~、電話のみ ※とっとり出会いの森との共催	
	《歴史講座》 「鳥取こちずぶらり」でまち歩き	10月16日(日)、江戸時代:10:00~12:00、近代:14:00~16:00/広徳堂、市内 ■一般/各回4名/無料 ●9月16日(金)~、電話のみ	
	《スペシャルアートレクチャー》 講師:雪山行二(富山県立近代美術館館長)	10月22日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《野外観察会》 おちばの中のモンスターをさがそう!	10月23日(日)13:00~16:00/とっとり出会いの森(鳥取市) ■幼児~一般/20名(先着順)/無料 ●10月6日(木)~、電話のみ	
	《出張講演会》 山陰の荒神信仰 講師:坂田友宏(米子工業高等専門学校名誉教授)	10月23日(日)14:00~15:30/大山寺圓院 ■高校生~一般/定員なし/有料(圓院参拝志納金)	
2016 11 NOV.	《ギャラリートーク》 テーマ展示 III 御道具譚	10月29日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料	
	《出張講演会》 荒神と龍蛇の神楽 講師:中野秋鹿(中村元記念館東洋思想文化研究所研究員)	10月30日(日)14:00~15:30/大山寺圓院 ■高校生~一般/定員なし/有料(圓院参拝志納金)	
	《見学会》 まるごと荒神神楽 上海、荒神研究会、下笠荒神神社、比婆荒神神社、中(予定)	11月3日(木・祝)10:00~15:00/大山寺三宝荒神社跡 ■小学生~一般/定員なし/無料	
	《アートセミナー》 1950年代のキュビスム 講師:尾崎信一郎(当館副館長)	11月5日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《野外観察会》 家族でたのしみ「しいのみさがし」と森ツアー	11月6日(日)10:00~12:00/博覧公園(鳥取市) ■幼児~一般/20名(先着順)/無料 ●10月20日(木)~、電話のみ	
	《出張講演会》 鳥取県の民俗芸能 講師:永井猛(米子工業高等専門学校名誉教授、当館学芸員)	11月12日(土)13:30~15:30/米子市立図書館 研修室 ■高校生~一般/定員なし/無料	
	《ギャラリートーク》 日本におけるキュビスムーピカソ・インパクト	11月12日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料	
	《歴史講座》 弥生のカゴを編む	11月13日(日)10:00~16:00/会議室 ■一般/10名(先着順)/参加費未定 ●10/13(木)~11/6(日)、電話のみ	
	《ワークショップ》 市内アート探検	11月19日(土)13:00~14:30/鳥取市内 ■高校生~一般/20名(先着順)/参加費未定 ●11月4日(金)~、電話のみ	
	《歴史講座》 伯耆往来を歩く 泊~はわい長瀬	11月20日(日)9:30~15:00/湯梨浜町内 ■一般/20名(先着順)/無料 ●10月18日(火)~、電話のみ	
2016 12 DEC.	《自然講座》 化石レプリカをつくろう!	11月20日(日)10:00~12:00/会議室 ■幼児~一般/20名(先着順)/無料 ●11月3日(木)~、電話のみ	
	《サイエンスレクチャー》 恐竜研究最前線-発掘からわかる地球と私たちの未来- 講師:小林快次(北海道大学総合博物館准教授)	11月26日(土)/14:00~16:00/米子市文化ホール ■小学生~一般/600名/無料	
	《ギャラリートーク》 「テーマ展示 IV」関連	11月26日(土)14:00~15:00/展示室 ■小学生~一般/定員なし/観覧料	
	《野外観察会》 はじめてのバードウォッチング	11月27日(日)9:00~12:00/湖山池(鳥取市) ■幼児~一般/20名(先着順)/無料 ●11月10日(木)~、電話のみ ※湖山池情報プラザとの共催	
	《スペシャルアートシアター》 ブンミおじさんの森	12月3日(土)/14:00~16:00/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《歴史講座》 鳥取藩の御小人について(仮)	12月10日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/定員なし/無料 ※鳥取地域史研究会との共催	
	《ワークショップ》 「テーマ展示 IV」関連	12月10日(土)詳細未定	
	《歴史講座》 古文書を楽しむ(前期)	12月11日(日)12月18日(日)14:00~15:30/会議室 ■一般/20名/無料 ●11月11日(金)~、電話のみ	
	《ワークショップ》 「クリスマス」関連	12月17日(土)詳細未定	
	《民俗講座》 鳥取県の民話を聞く会	12月18日(日)14:00~15:00/歴史・民俗展示室復元民家コーナー ■小学生~一般/約40名/常設展示入館料が必要	
2017 1 JAN.	《民俗講座》 しめ飾りを作ろう!	12月25日(日)14:00~16:00/会議室 ■小学生~一般/20名(先着順)/無料 ●11月26日(土)~、電話のみ	
	《ワークショップ》	1月7日(土)詳細未定	
	《歴史講座》 鳥取県の小水力発電(仮)	1月14日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との共催	
	《ワークショップ》 キューブでアート	1月14日(土)10:00~12:00/13:00~15:00/エントランスホール ■幼児~一般/定員なし/無料	
	《ギャラリートーク》 コレクション展 VI	1月21日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料	
	《アートシアター》	1月28日(土)詳細未定	
	《民俗講座》 たこをつくってあげよう!	1月29日(日)10:00~12:00/会議室 ■幼児とその保護者/10名/無料 ●1月4日~、電話のみ	
	《ワークショップ》	2月4日(土)詳細未定	
	《アートセミナー》 バーナード・リーチと山陰	2月11日(土・祝)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料	
	《歴史講座》 古文書を楽しむ(後期)	2月12日(日)2月19日(日)14:00~15:30/会議室 ■一般/20名/無料 ●1月12日~、電話のみ	
2017 2 FEB.	《ワークショップ》 触って楽しむ美術作品	2月18日(土)10:00~15:30/会議室 ■小学生~一般/定員なし/無料	
	《アーティストトーク》 「創造的対話」関連	2月25日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料	
	(「創造的対話」関連イベント)	3月4日(土)詳細未定	
	《歴史講座》 凶解 昭和20年のとっとり	3月11日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との共催	
	(「創造的対話」関連イベント)	3月11日(土)詳細未定	
	(「創造的対話」関連イベント)	3月18日(土)詳細未定	
	《歴史講座》 伯耆往来を歩く はわい長瀬~下北条	3月19日(日)10:00~15:00/湯梨浜町~北条町 ■一般/20名(先着順)/無料 ●2月21日~、電話のみ	
	《ギャラリートーク》 テーマ展示 V 濱田台児童展	3月25日(土)14:00~15:00/展示室 ■小学生~一般/定員なし/観覧料	
	2017 3 MAR.		

美術部門の詳細については、「毎週土曜はアートの日!」のリーフレットをご参照ください。

※特に記載のないものは申込不要です。※講座によっては材料費などが必要な場合があります。詳しくはホームページなどでご確認ください。※小学生以下は保護者同伴でご参加ください。
 ※託児サービス・手話通訳・要約筆記にも対応いたします。希望される場合は3週間前までにご連絡ください。

鳥取県立博物館ニュース No.22

平成28年(2016年)9月28日発行
 編集・発行 鳥取県立博物館
 住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地
 TEL 0857(26)8042(代)
 FAX 0857(26)8041
 URL <http://www.pref.tottori.jp/museum/homepage.htm>
 E-mail hakubutsukan@pref.tottori.jp

■入館料:常設展/一般180(150)円
 ()内は20名様以上の団体料金
 ■開館時間:9時~17時(入館は16時30分まで)
 19時(入館は18時30分)まで開館する場合あり。詳細はお問い合わせください。
 ■休館日:毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
 国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
 年末年始(12月29日~1月3日)
 ※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



お客様の満足の笑顔へ...
MORRIX
 株式会社モリックスジャパン
 TEL 0857-23-3641
 本社 鳥取市南栄町203-6
 倉吉店 倉吉市下町中町870 中瀬ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

引越は日通
 フューチャール ひっこしはにっつう
 0120-154022

- JR鳥取駅からバスで
- 100円バス「くる梨」緑コース①仁風閣・県立博物館下車すぐ
- ②ループ側踏切子②鳥取城跡下車すぐ
- ③砂丘・湖山・磐雲方面行「西町」下車、約400m
- ④市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
- JR鳥取駅からタクシーで、約10分
- 鳥取砂丘コナン空港から、鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
- お車で、鳥取自動車道、鳥取ICより約15分
- ※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場無料へ